

片柳栄一著

『初期アウグスティヌス哲学の形成——第一の探究する自由』

創文社，1995年，vi+410+17頁

谷 隆 一 郎

本書は表題に示されているように、初期アウグスティヌスの、とくに386年におけるミラノ回心前後の思想形成を歴史的かつ本質的に解明した力作である。その際、マニ教との格闘、アカデミア派の懐疑論との拮抗、さらには新プラトン主義との関わりといった契機が重ねて論じられているが、それは従来 of 欧米の諸研究などに巾広く目を配りながら、独自の視点からアウグスティヌスの歩みの基本的動向を浮彫にしたものとなっている。

その全体の構成としては、序論「第一の探究する自由——アウグスティヌスの〈回心〉をめぐる新しい視点——」にて論究の全体的観点が提示されたのち、第一編「若きアウグスティヌスの精神的遍歴」、第二編「神探求の場の発見——ミラノにおける新プラトン主義的キリスト教との出会い——」、第三編「探求的信仰の確立と〈回心〉」という三つの部分において、初期アウグスティヌスの探求の全体像が見定められている。各々の編は三つないし四つの章を含むが、それらは必ずしも直線的な叙述ではなく、アウグスティヌスのさまざまな思想潮流との拮抗という問題に何度か立ち帰りつつ、全体を貫くアウグスティヌスの探求の中心的場面を洞察しているのである。

さて著者はまず序論において、「第一の探求する自由」という『自由意志論』の用語に注目し、「探求の自由の開けに、如何に道としてのキリストに対する信仰が重要な役割をはたしているか」(p. 12) という、論究の要となる視点を示す。そうした展望を受けて、続く第一編第一章「〈ホルテンシウス体験〉と〈知恵の探求〉への決意」では、キケロの「ホルテンシウス」によって知恵への探求を促されたアウグスティヌスが、その後マニ教の聴聞者となるということのうちに「決意とその結果としての迷

い」(p. 45) が存するとされる。その意味では、当時ケケロに感じた「キリストの名の欠如という不満」は多分に両義的であったが、ホルテンシウス体験を経てマニ教に接近してゆく態度にはやはり「永遠性への希求の切実さ」が認められるのである。そこで第二章「アウグスティヌスとマニ教」では、「アウグスティヌスほどの知的青年がなぜ九年間もマニ教に留まっていたのか、マニ教とはそもそも何なのかが過不足なく論じられる。その際著者がとくに注目するのは、「可苦的イエス」Jesus patibilis という思想である。それは、「北アフリカのマニ教徒が神の分子の自己犠牲的苦悩と世の罪の為に十字架上で苦しむイエスの苦悩とに共通なるものを見て」作り上げられたものであり、そこには「救済者自身がかつて救われた者であるという構造」が存する。つまり「グノーシス主義の極北たるマニ教が中心に据えるのは、「この時間的歴史的な生における苦悩、苦難の問題である」(p. 99) が、そうした「人間実存の苦悩に満ちた独自性と世界のうちの異邦性の意識にあって」、なおも「神的なものとの同一性を保持しようとするれば、そこには必然的に苦悩する神、救済された救済者といった矛盾した思想を語らざるをえなくなる」(p. 99)。アウグスティヌスはかかる宇宙生成論を含むマニ教にかつて共感しつつも、結局は「マニ教が人間的生の固有性、自由意志による時間的生の変貌の意味を見出していない」(p. 81) ことを厳しく批判するに至るのである。また第三章「アウグスティヌスと懐疑主義」では、「真理が把握されえないというのが信憑的 *probabile* だと思われる」とするアカデミア派の人々に対して、アウグスティヌスにあっては「確かに未だ真理は見いだされていないが、知者によって見いだされうるのが信憑的である」(p. 123) ことがさまざまな角度から吟味される。そして「真理への関わりが発見の可能性として保持される」のだが、「それは無知の薄暗がりの中に立ってなお、知への関わり、知への方向性を持つとすること」(p. 124) であった。著者によればアウグスティヌスは、独断を退けるアカデミア派に幾分かいわば「隠れた同盟者」を見つつも、真理の直視には至りえぬ人間存在の中間的性格を「しだいに信仰というものの構造として定式化してゆく」(p. 129) のである。

次に第二編では、新プラトン主義との出会いを通してアウグスティヌスが如何に自らの思想を形成していったかが、『ソリロキア』、『秩序論』、『自由意志論』、『告白』そして幾つかの『書簡』の吟味を通して明らかにされてゆく。それはアウグスティヌスの回心を単に「新プラトン主義にか、キリスト教へか」といった仕方では問題にする

のではなく、より内的に「神探求の場」、「不滅なるものの現臨する場」(p. 182)としての魂を見出し、そうした場の「明澄化」を意図するものであった。そこでまず注目されているのは、諸々の判断の根拠が「可変的な魂にあって不変的なものとして知られる」とはいえ、それはあくまで超越的なものであるということである。従って「判断における根拠への絶対依存性、根拠の超越性は……なお不可視の神性をいわば手探りで求めていく探求の第一歩なのである」(p. 153)。「カッシキアタムのアウグスティヌスの努力は、真理の在処としての、つまり神がそこで探求され出会う場としての、魂の場を出来る限り透明にすることであった」(p. 187)。その課題は初期のいわゆる照明説の吟味として遂行されているが、その結果、「人間の神探求の原動力が神の呼びかけそのものにあり(恩恵論)……しかもその呼びかけは神の根底的な光の照明と同じことだ」ということが確認されてゆくのである。

だがここに最も困難な問題として横たわっているのが、言うまでもなく悪の問題である。アウグスティヌスにあってそれはむしろ、マ=教的な悪の実体化を虚妄とし、善の欠如としての悪という新プラトン主義的な把握を摂取してゆく道となってゆく。が、さらに、「人間的悪である罪は、永遠の形相への背反、離反である」としても、「この離反の運動の原因は何処にあるのか、この最後の謎めいた問が残る」(p. 235)。それは、「自由に不自由になっている故に、自己自身では自由になりえない人間の恐ろしい罪の現実性」(p. 236)を指し示すものであった。しかし著者は創造の謎とも言うべきそうした最後の位相を注視しながら、本書においてはあえて手前に踏み留まるかのごとく、次の第四章「プロティノスに遡って」では、その「分有の思想」、「二元論克服の論理」を洗い出してゆく。そしてプロティノスにあって「事物の根本素材(質料)が第一の悪なのだ」(p. 268)が、「それは単なる無ではなく、それを見つめる者がその欠如をみずからに夢みるような、或る種の欠如のリアリティを持っている」(p. 277)とされる。この点新プラトン主義は、「感覚的世界を一面的に虚偽として否定しざるグノーシス思想とは異なる」(p. 282)という。ただプロティノスの「同一性思想」の根本にある意図は、「同一的なものと一つになることである」。つまり「我々があらゆる異多性を放棄し、自己に身を向け、そのようにして〈一者〉に身を向ける時、つまり〈一者〉の遠き超越の荘厳さに身を据える時に」(p. 305)、我々は我々のうちなる一者の近みにあることに気づくとされる。

しかし「神の直視ではなく、信を通して歩むほかない」人間にとっては、この点

にこそ問題が隠されているのであって、著者は「アウグスティヌスが哲学的自覚の上昇論から聖書の創造論へと自らの思索を徐々に組み替えていったのも、根本的にはプロティノスの同一性哲学に対する抵抗と克服を試みたからであった」(p. 238)とするのである。言い換えれば、『告白』に語られているような「新プラトン主義的神秘体験そのものが、信仰を用なしにしてしまうのではなく、ますます信仰の不可欠性をアウグスティヌスに味あわせ、叡知的世界へ至る道として叡知そのものが肉体を取ったというキリストの受肉の意味を理解させるきっかけを与えた」(p. 367)と意味づけられている。かくして第三編においては、「信憑的なものと信仰」の意味が改めて初期著作に即して問われ直され、「神的知性の受肉の出来事」、「道としてのキリスト」が指し示されるのだ。ちなみに最終章「創造における *conversio*」は、『創世記』冒頭の箇所に対するアウグスティヌスの後期の解釈を扱うものであるが、著者はそこにおいて、プロティノスの概念がアウグスティヌスにあっては「創造論のうちに組み入れられ」、人間の「絶対依存性を自覚的に、自由に受け容れる被造的存在の、神に対する自由なる関係性を基礎づけるもの」(p. 399)となっていると、洞察しているのである。

以上略述してきたように、本書は主としてアウグスティヌスの回心前後の思想形成とそこに含まれる問題点を精緻に跡づけ解明したものであり、各々の論究に学ぶべきところの大きな研究である。一言だけ附言するなら、新プラトン主義の摂取からキリストの信への道を語るくぐりや、われわれを改めて創造の謎、自由の深淵とも言うべき罪の問題の前に立たせ、キリストの存在をいわば使徒たちの原初的出会いの経験の場に遡って、われわれ自身の内側から見出してゆくことを促してくるように思われる。それは恐らく愛智の道そのものとしてのロゴス・キリストの問題であろう。
